

非業の死、ということがある。雲仙の火砕流に吞まれた人々、中近東の戦いに消えた多くの命、子供や若い女性のみならず壮年の男性を含む誘拐されての死。「悪魔の詩」の記者が受けた凶行といった特殊なもの、これらいずれも悲惨で悼むべきものとして、皆それを残念に思う筈である。

しかし、もしかりに、私などがそこいらで思わぬ死ということになっても、せいぜい「オバハン横死！」程度にしかならないだろう。そしてこの犬死のチャンスに私は結構恵まれて来た。

これはその一つ、病院勤務中の話である。

ある秋の日、一般病棟六人部屋に肝障害と十二指腸潰瘍で一人の若い男が入院した。彼は院内規約に全く注意をほらわずに生活し、ふくろうの如く夜ベッドまわりで活躍したから、同室のスズメ型高齢者達とはたちまち冷戦状態に入った。ところがたまたま同年齢の男性が外傷で入院、不幸にして意気投合した。この友情によって生じたエネルギーで彼は生き生きとしたのみか、大きく軌道はずれて夜間院外飲酒をこころみるのである。

友人氏が動けなかったのは幸いである。彼は友達の不在をせっせといつくるっていた。結局事実が判明し、連絡により本人に問いただしたところ、少しテレた様に、

「オッ、悪かった、もうすりゃあせん」

私など、その子供っぽい表情にむしろ好感を抱き、つい、につこりした程だ。

ところが彼はワープをくり返す。

ある朝、無断外泊、飲酒帰院と明瞭な報告を医局で受けた私はカンカンになって病室にとび上がった。いった。

「まずい、甘すぎた」

ここいらは何度も旦那に裏切られた女房の心情にちかいものがあるかもしれない。彼の方はひらきなおってか、決められた寝衣に着替えもせず、外出着のままベッドに腰かけ、外出に協力した相棒の方は布団から亀のように首を伸ばしている。部屋に飛び込んだ私はキツチリと言い渡した。

「前からいつてあったでしょう。もう三回目ですからね。退院してください。肝臓が悪いのになんで飲んだりするんですか」

「おーおー」

彼は何だかボワツとした風でうなった。霧の中で方向もわからず立っている様で、はなはだあぶなっかしかったが、私はいうだけいうとすぐ詰所に向かった。まだカッカとしている。

詰所では、申し送りますんだナース達が、

「そりゃね、先生ひどいんですよ。気づかなかった分もあったんでしょう。あの部屋いたくないって他の患者さんが言ってたけど」

「出入りで寝られんでAさん熱が出ますよ」

「朝、服のまま、メシはいらん——なんですよ」

と口々に話していたが、その中の一人が、そっと、

「あの人は気をつけた方がいいですよ。刃が十五cm位あるナイフをバンドのうしろにいつも差していると言っていましたよ」

私はカッカとしなくなった。かわりに頭の中でブーンと警戒音がなり始めた。それにしても忙しい病院で、走りまわって昼食の頃にはすっかり忘れていた。夕方、医局に一枚の洋半紙が届けられた。びっしりと字がかきつけてある。繊細な字である。

「いろいろ先生にや世話になった。自分が悪うねえとはいわん。しかし友達の前でようも恥をかゝせてくれたな。今度のことはどうしても許せん。男にや立場もある。こんど会った時は覚悟しとけよ。月夜の晩ばかりじゃねえ。刃物の一つ位いつももつとる……」

あとの方はよく覚えていない。『月夜の晩云々』はあんまりだ。こんなありふれたおどし文句で——だが私は仕事を続ける元気を失った。とりあえず詰所にその紙を持って上り、

「とんでもないことになったから、彼が来た場合教えて下さい」

と頼んだ。又、玄関のガードマンにも当分気をつけてみていて下さいと伝え、院長のところに行って報告したら、

「まあ、実際はすりゃあせんだろうが、当分用心した方がいい。言い方はちよつと気をつけた方がいいぞ」

私はブチブチいいわけをし、しょんぼりと医局に座りこんだ。どうやって身を守るか。夕陽がひどく赤い。私は食器棚の中から七味トウガラシをつまみ上げて左のポケットにいれた。

それから、毎日、夕方病院の玄関より脱兎の如くとび出し車にとびつきとびのる。月夜であろうとなかろうと、コトは晩だ、と思っている。何日かたった、彼の相棒も退院し、半月たち、ガードマンが「だいじょうぶですぬ」といつてくれ、ナースが「彼はあれきり来ませんよ」といつてくれるうち私は次第にその件を忘れはじめた。

以前のようにぼんやりとエレベーターに乗り、むきをかえた時背後で、

「先生、こんにちは」

私は何となくギクツとしてふりむいた。彼だった。私は恐らく情けない顔をしていたろうと思う。彼は凄みをきかせてニヤリとした。私の手は左のポケットをさぐっていた。コツンとふれるものがある。おお、しかし刺されるとすればほんの一瞬であつたらう。私は一息してから、

「ああ、このごろ元氣？」

といったが、自分の声のようではなかった。彼は体をゆすりながら、

「今日、友達が又入院したんじや」

気がついてみると、エレベータの中に他の人はいないのだった。彼の顔が次第にやわらかくなり、しまいにはすっかり普通の顔にもどつた。エレベータがとまった時、もう一度彼はニヤリとしたが、それもなんだか満足気な感じだった。

エレベータを降りると膝から下の力が急にぬけた。医局に帰りつき、一ぱいのコーヒーをのみ、頭をひとつひねってから私は七味トウガラシをポケットからとり出して——だいぶためらったのち、もとの棚に返しておいた。七味トウガラシを買いかえないといけないなあと思っては忘れた。今でもこの七味トウガラシの件だけは相済まぬと知っている。

先日この話をしていたら、なぜコシヨウにしなかったんだ、その方がダンゼンいい、と言われた。ああコシヨウのほうがよかったかしら、そうかもしれないなあ——私はぼんやり考えた。

死は一瞬のうちに訪れるが、のがれた人間の中でさえ、その事実は次第に風化してゆくのだ。また新しい訪れを感じるまで。